破滅の遺伝子1

@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "ＭＳ 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@ＭＳ 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "ＭＳ 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }

自然界において、宿主の行動を支配する寄生生物はいくつか報告されている。それぞれが必要とする（特に繁殖に適した）環境に移動できる様に宿主の行動を支配する微生物である：鳥の体内に寄生する為に魚の体内に入り込み、その魚を鳥が補食しやすい様に水面近くを泳ぐ様にする：鳥の体内に寄生する為にあるカタツムリの体内に入り込み、鳥が捕食しやすい場所にそのカタツムリを移動させる：猫−ネズミ−猫と、それぞれの体内を渡る為に、宿主となったネズミの猫に対する防衛本能をなくす：水中での繁殖の為、宿主を水辺に移動させる為に、宿主に内側から火傷のような痛みを感じさせる、、、などなど。

20XX年、3月、午前6:00、都内某所。某ファストフード店の目の前にあるゴミの収集所。3羽のカラスが『カラスよけネット』を器用にめくって、生ゴミをあさっている。突然、その中の1羽が大きな鳴き声をあげ、妙な動きを魅せた。カラスとは思えない『身のこなし』。伝説の暗殺拳『南都酔鳥拳（なんとすいちょうけん）』。しばらくすると満足そうに飛び去って行った。数週間後、その近辺ではケガをしたカラスが頻繁に見つかる事になるが誰も気に留めなかった。

20XX年、5月、午前11:20、都内某所。某T大学大学院、古生物研究室。研究員同士の会話。「しかし、よくGWU（アメリカの某大学）から分けてもらえたもんだ。」「いやはや、まったく。」「地下の氷の中から恐竜のミイラ、、、」「しかも、新種の可能性が高い。さらに通常考えられているT-REXよりも大きい。」「まあ、しかし、このサンプルとも今日でお別れだ。後は『お台場、ビッグサイトの恐竜展』で展示されて、あとは国立博物館行きだ。」「しかし、例の『アレ』、気味が悪いですね。」「まったくだ。」「まあ、『アレ』に関しては、もう少し研究してみよう。トップシークレットで。もしかしたら恐竜の絶滅に関わっているかもしれない。」「でも、微生物は我々の分野じゃないですけどね。」研究者の間に『ノーベル賞は俺の物』とか『ネイチャーに俺の論文掲載』とか『○○は俺の嫁』とか余計な妄想が広がっていた。

20XXの前年にあたる『20XX−１』年、8月にアメリカ、モンタナ州のグリンネル氷河の地下で『1990年にアメリカ、サウスダコタで発見され、「スー」と名付けられたT-REX』よりもさらに大きな恐竜のミイラ化した化石が発見された。それもほぼ『冷凍保存』の状態で。長い年月と、地殻変動からくる圧力で、骨格自体は『ぐっちゃぐちゃ』になっていたが、筋肉及び脳の組織が完全とは言えないが確認されており、その筋肉と脳の組織の一部を国立博物館のバックアップと共にアメリカのGWUから譲ってもらい、『DNAマップだの何だの』と研究をしていたのであった。いろいろと研究した結果、GWUが既に出していた研究結果と同じ結果が出た。この個体が生き

ていたのは約6500万年前、趣味は不明、『タロット占い』ではないことは確かだった。白亜紀の終わり。恐竜が突如、姿を消したと考えられている時代。その外観からT-REX、いわゆるティラノサウルス(体長11−13m)と思われたのだが、通常のそれらよりも体が大きかった。GWUの研究員によると推定体長17m。さらに小さいながらも羽毛の痕跡まで発見されおり、『T-REXの幼体に羽毛があった』説に拍車をかける発見であった。

んで、その200gほどの『筋肉組織』と5gほどの『脳』のサンプルは『丁寧に』梱包された後、『無造作に』クール宅配便のトラックに積み込まれて、お台場、ビッグサイトへ。
20XX年5月、午後17時頃。1羽のカラスが走行中の宅配便トラックに激突。死亡。運転手の話によると、そのカラスは正面からトラックに向かって来たそうだ。そのカラスが死ぬ間際に『僕は死にましぇん。』と言ったかどうかは不明。その後、都内で頻繁に発生していた『荒ぶるカラス』による無差別『乱暴狼藉』はなくなった。が、それとほぼ同時期に、都内では何者かによる『暴力事件』が多発。被害者の証言によると犯人は20代の男。その暴力事件は回を重ねるごとに暴力の度合いを増し、犯人の行動範囲も広くなって行った。始めの被害は殴られたり、ドロップキックをされたり、パイルドライバーをされる程度だったが、出血するまで『噛み付かれる』という被害者が出て来た。が、たいしてメディアが取り上げなかったので（＊某芸能人のスキャンダルの方が優先事項であった為）、周辺住民の危機の意識は、内閣支持率同様、すこぶる低かった。（オリゴン調べ）

20XX年7月、お台場ビッグサイト、午前2時。『大恐竜展』開催を二日後に控えた会場。6人のフルフェイスのヘルメットをかぶった『全身真っ黒』の武装集団が『あっさり』と警備を突破。睡眠剤入りのペットボトル緑茶と、『アサガオの種』入りの大福が『差し入れ』として利用されていた。テロとは全く無縁のイベント会場だけに、警備のプロ意識もまた低かった。

武装集団の目当ては例の恐竜の筋肉と脳の組織だった。『何かレーザー的な道具』を用いて、彼らは冷凍機能付きの展示ケースに穴をあけて、筋肉と脳の強奪に成功。どこにでもあるようなクーラーボックスに入れて、警報ベルの鳴り響く中、出口へ向かって逃走。逃走用のボートに乗り移ろうとしたその時に、突然現れた若い男が奇声をあげながらクーラーボックスを持っている武装集団員に飛びかかった。格闘の最中に武装集団のうち3人が謎の男に『噛み付かれ』た。けっこう血が出た。別の一人がサバイバルナイフと『スタンガン』でもって応戦。そのスタンガンには何故か『ハンセン』と書かれていた。結局、謎の男も腕にケガを負って、そのまま闇の中へ逃走。なんとか『恐竜の筋肉と脳』を死守した武装集団はボートに乗って闇の中へ。

しかし、そのボートでは謎の男に噛み付かれた武装集団の３人が突如『発狂』。ケガをしていない３人と『３対３』の『取っ組み合い』に。昔の漫画のような砂ぼこりの中から顔や手足が見え隠れするような格闘の末、正気な方の3人は発狂した3人に『睡眠剤入り吹き矢』を素手で刺す事に成功。沖に停泊中の仲間の貨物船にたどり着いた、、、が、しかし格闘の最中にせっかく盗み出した恐竜の筋肉と脳のサンプルを落としてしまったようで、団体責任者から『こっぴどく』叱られた。罰として組織の中で『誰が好きなのか』白状するよう迫られた。

その謎の武装団体は『捜索』の為に新たにボートを出し海上を回ってみるも、例の『クーラーボックス』は『ほぼ元の場所』まで波に戻され、防波堤で夜明け前の釣りを楽しむオッサンの釣り糸に絡まっていた。そのオッサンは当然、ケースの中身よりも自分の釣り道具と釣果の方が大事なわけで。ケースはその中身を確認されないまま、ただの『落とし物』ということで、たまたまそばを通りかかった巡回中のパトカーに預けられた。その頃には『恐竜展』の警備を担当していた警備会社から『強盗』の連絡は警察にまわっていたのだが、その連絡は一部の人間にしか伝わっていなかった。で、報告書に記載された後に『放ったらかし』にされた。

午前6時。そのケースを預かる事になった警察官。当然、中身を見ても『恐竜の筋肉と脳』のサンプルだなんて分かるわけが無い。丁寧にラッピングされた肉の塊と灰色の『なんだか分からない』物体。一応、クーラーケースだけは通常の『落とし物』として扱う事にして、中身は『なんだかヤバそう』な感じがしたので、誰にも知られていない事をいいことに『生ゴミ』扱いで破棄されてしまった。そして、やはり、それをカラスがついばんでいた。

20XX年7月、午前10時。『お台場大恐竜展』開催。当然、来場者の一番の目当ての冷凍保存された恐竜の『筋肉と脳』は戻って来ていないので、よくできた偽物でやり過ごす恐竜展運営サイド。その偽物は飲食店のメニューの見本の制作会社に内密に依頼し制作させた。したがって『筋肉サンプル』には蝋細工職人のこだわりで、パスタメニューよろしく、『フォーク』が刺さっていた。これは『ジョーク』として受け取られ、来場者は誰もそれが偽物だとは思わなかった。

まだ同年７月、都内の某Ｔ大学院。古生物研究室。研究員たちは5月からある謎の微生物の研究を続けていた。例の氷付けの恐竜の筋肉から十数個、脳から１つ発見された微生物。分類上は一応『真性細菌』。（ただ、この分類に入る微生物が、健康な状態の生物の脳内に侵入する事は『ほとんど無い』。髄液や脳脊髄液に細菌が侵入する事はある。）初めはただの微生物の痕跡、または死骸かと思われたのだが、常温で観察を続けるうちに『息を吹き返した』のであった。そして『X2010』と適当に仮名がつけられたソレは培地の中で著しい早さで増殖を始めた。が、増殖を始めたのは『筋肉』から発見された方で、『脳』から発見された方が激しく増殖する事はなかった。108体に増えた所で、増殖は停止。そして、ただ培地の中で、何かを待つ様に静止していた。ちなみにどちらも内部寄生体で空気中では生息できないらしい。消毒用のアルコールや放射線

も一応苦手のようであった。が、零度以下の環境に限り『芽胞』の形をとり休眠状態になる。

　　さらに観察を続けると、筋肉から摘出された方の『X2010』の増殖はある程度の数に達すると停止して、さらに、そのうちの９割ほどが自然に死滅することが分かった。さらに試しにネズミに移植してみたら、翌日ネズミが凶暴化した。その体内では『X2010』が大量に増殖していた。筋肉と脊髄の周辺を好む傾向が観察された。恐ろしい事に、たまたまその凶暴化したネズミに噛まれた別のネズミもまた凶暴化した。試しに他の数匹のネズミも一緒にケースの中で観察してみると、やはり、『X2010』に感染した個体に噛み付かれて凶暴化した。それぞれの個体は隔離された。が、数日後、感染したネズミはすべて大人しくなり、やがてエサを食べなくなった。そして餓死。一匹を残して。その一匹は元々、他のネズミに比べると体が大きかったのだが、さらに筋肉が他のネズミに比べると、感染前よりも大きくなっていた。

研究員達の会話。「これ、まだ人に寄生するかどうか分かったわけではないですが、人に寄生したら『とんでもない事に』なりそうですね。」「ゾンビ映画みたいになるってか。」「まあ、ここで厳重に管理していれば問題ないだろう。」「そうですね。空気感染はしないようですし。」で、一人の研究員がデスクトップパソコンの前に座りこう言った。「あの、、、そのこと何ですが。最近話題になっているこのYouTube動画なんですが、まあ、見てください。」

その動画のタイトルは『恐竜バーガーつくってみた』。映像では、どこかのファーストフード店の厨房で若い男がハンバーガーを１つ作り「世界初の恐竜バーガー、いただきまんもす。」と言ってハンバーガーを一口食べて、「マズくもなく、美味くもなく、、、」と呟いて、残りをゴミ箱に捨てた。動画のコメント欄には『お前、いくつだ?　』とか『次は宇宙人でも調理する気か』とか『お台場の恐竜展に行って来ました。』とか『ぼくドフえもん。』とか書き込まれていた。

それを見た研究員の反応。「これ、ひょっとして、ウチの学生?」「はい。研究室の周りをウロウロしているのを見た事があります。」「筋肉サンプル、盗み出したのか?」「で、この馬鹿は今どこにいる?」「しばらく大学に姿を表していないようです。」「映像を見る限り、コイツ、喰ったよな。」「はい。飲み込んでましたね。」この人達は『社会よりも古生物』に興味があるので、巷を騒がせている『謎の男による襲撃事件』の事なんて何にも知らなかった。

そこへ一人の研究員がアメリカのGWUの研究班からのE-mailを受け取る。内容は『例の物騒な微生物』は『強い電圧をかけると49％の確率で遺伝子に変異』が起こり、行動が少し大人しくなる一方で、『乾燥した空気中でも15分程生存が可能』になる。つまり空気感染の可能性を示唆。と、いうもの。さらにGWUは大学だけでは手に負えないと判断し、国の微生物研究機関に管理を委託したそうだ。

研究員の反応。「、、、マジか。まあ、感染者が家電で『感電』か、雷に打たれでもしない限り大丈夫だろう。」「そうですね。」「まあ、かなりの確率で雷に打たれたら死にますけどね。」「そうですね。あと『スタンガン』とか。」「仮に、なんかあったら、『我々の責任』になるんじゃないだろうな。」「まずいな。それは。」「でも、まだ人間に感染するかどうか解らないし、、、」で、彼らも何だか『怖く』なったので民間の微生物研究所に『X2010』の管理を『押し付け』ようとしたが、やはり彼等だけの機密事項にすることにした。目指せ『ノーベル賞』。

約一週間後、再びGWUからの研究報告がE-mailで届いた。それによると、『X2010』の遺伝子が電圧により変異を起こし空気感染した場合、宿主（ネズミやサルで実験）が凶暴化することはないらしい。が、その代わり、行動が緩慢になったり、エサを食べなくなったり、飼育ケースの壁に頭を意図的に打ち付けたり。自殺かと思われる行為が観察されたらしい。そして遺伝子に変異を起こしていない方の『X2010』に感染した結果凶暴化した実験個体は、狭い空間内でその数がある程度増えると、急に大人しくなり、やはり『自殺かと思われる行為』をとるということである。

一方、恐竜の脳から発見された 『X2010-B』であるが、ワシントンのGWUからのレポートには一切、脳からの検出の記録がなかった。恐竜の脳自体、そんなに大きなものでもないし、健康体の生物の脳にこの手の微生物が侵入する事はまずありえない。偶然、今回譲り受けた部位にのみ『X2010-B』が存在した、と結論。するとGWUのある教授からその『脳から検出された方、X2010−B』を譲る様に依頼があった。既にGWUは研究・管理を国の機関に委託していたはずなのだが、何故に?　気が変わったのか?　『X2010−B』は、その個体数からしても、貴重な発見だったので、その某Ｔ大学院研究員たちは『今は決めかねるので、返答はまた今度ということで、、、』と日本人ならではの『曖昧』な返答を送信した。

20XX年、8月。アメリカ海軍との合同演習中の海上自衛隊により、太平洋沖で謎の貨物船が発見される。その貨物船の内部は完全に『幽霊船』と化していた。乗員は皆、死亡していた。乗員が激しく争った痕跡が船内のあちこちに見られた。さらに大量の物騒な武器、パソコン、生物学的な研究機材、浅草の人形焼き、、、が船内で発見された。翌日、その事実はアメリカ海軍により『一方的』に『機密事項』となり、日本の海上自衛隊は完全に『蚊帳の外』。日本国民に知らされる事はなかった。海上自衛隊側は政府に『何事か?』と尋ねるも『そこは穏便に。』と、これまた日本人ならではの『空気を読め』という名の下の曖昧な返答であった。

そんなこんなで、Ｔ大学研究室での『X2010』と『X2010-B』の観察は続いた。

感染していないネズミからその体内に寄生する他の微生物（大腸菌など）を摘出。『X2010』を試しに接触させてみた。すると『X2010』は他の微生物に接近するや否や、細胞膜を一部癒着させ自分の『＊プラスミド』を移動させ、大腸菌プラスミドと結合。（＊プラスミド：細胞質内に存在する本体の染色体DNAとは独立した環状のDNA分子。酵母や細菌などに見られる。）結果、プラスミドを移された微生物は51%の確率で形質転換。『X2010』のような活動が観察された。つまり、初めは尋常でない程に活発に活動し、ある程度『同族が増える』と動きが緩慢になった。

先の実験で『X2010』に感染させ、凶暴化したネズミのうち、唯一生き残ったネズミを解剖してみた。既に死亡していた他の感染ネズミには見られなかった『脳への感染』が観察された。再び数匹のネズミを感染させ観察してみた。みな凶暴化し、そのうち一匹を残しエサを拒否するようになり死亡。生き残った一匹はやはり体が一番大きい個体であった。そしてその大きなネズミのみ、脳内で『X2010』が発見された。そして、『X2010-B』の特徴が確認された。

研究員の一人がGWUからの報告を思い出した。『強い電圧をかけると遺伝子に変異』が起こり、49％の確率で『空気中でも生存が可能』。で、『あーだ、こーだ』の論争の末、宅配ピザが届き、切ない思いも届き、そして脳内の神経細胞が情報伝達の際に流す『微弱な電気』。それが『X2010』に高電圧とは別の形質転換を引き起こすと推測された。それが目的で『X2010』が宿主の脳に寄生するのかどうかは証明しようがなかった。

筋肉から摘出された『X2010』を脳から摘出された『X2010-B』に培地の中で接触させてみた。確証はないのだが、『支配者（X2010-B）』と『被支配者(X2010)』のような関係が観察された。通常は活発に運動、分裂を繰り返す『X2010』なのだが、『B』と同じ培地の中では大人しくなった。その一方で『B』は痙攣する様な運動をしていた。何らかの情報伝達を行っているのかもしれなかったが、やはりこれも証明しようがなかった。なぜならコレも『あまりにも空想科学』すぎる。

『X2010-B』同士を同じ培地で観察した場合、基本的にお互いに完全に距離を置いた環境を好むが、しばらくすると互いに『引き寄せあう』ような行動が観察された。

さらに『B』の方は宿主の血液を凝固させたり、それをまた元に戻したりする力を持つ事が判明。宿主の脳内の血流に影響を与え、それが宿主の思考や行動を狂わす可能性が議論された。インスタントの『焼きそば』が湯を入れたまま放ったらかしにされた。

さらに同年８月。都内では『謎の男による連続襲撃事件』はピタリと止まっていた。が、その被害者のうち、男に噛み付かれた者のうち半数が暴れだし、幸い皆が現行犯で警察に御用。留置所においても彼等の凶暴化した言動が治まることはなく、担当の公安職員は対応についてしばらく頭を抱え、都内の病院の精神科へ入院させようとした。しかし、その矢先に留置所で『ひとまとめ』にされていた『狂人達』が大人しくなり、やがて一人を残し壁に頭を自分で打ち付けて死亡した。残った一人は念のために予定通り『精神科』へ。その残った一人は、その狂人達のナカでも一番の大柄な体格をしていた。ようやく日本国内のメディアもこの件に興味を持ち始めた。

一方、都内の病院には『なんともいえないダルさ』を訴える患者が訪れており、その数は、年齢性別を問わず、日に日に増加していった。その原因は不明であった。患者は『適当な薬品を処方』され、原因不明のまま帰宅させられるのだが、今度は『風邪』に似た様な症状で再来院するのであった。その患者の来院数があまりにも多かったことと、あまりにも『風邪に似た症状』だったので、詳しい検査を実地する病院はなかった。そしてそのまま被害は急速に拡大。『夏休みシーズン』も手伝って、ただでさえ医師が不足気味の千葉、埼玉は大騒ぎさ。

この奇病の症状として注目されたのは、『それが直接の原因で死に至る』ことは無いのだが、感染者の多くが風邪に似た症状が治まると、『なんらかの方法で自殺を計ろうとする』ということ。『風邪薬の副作用説』が再び復活しかけたが、『それら』を服用していない患者にも『その傾向』が見られたので、はい、消えた。ちなみに、その『自殺の傾向』に関しては、日本政府からの指導のもと『報道規制』がしかれた。が、一部の『週刊誌』ではイロイロ『ある事、無い事』報告されていた。

まもなく感染被害は仙台、名古屋、大阪、、、と日本各地の中枢都市に拡大。何故か北海道内では感染は確認されなかった。さらに不思議な事に都市部から離れた地域での感染被害は『皆無』であった。人口密度と発症例が『あからさまに比例』していた。早速、中国と韓国のメディアが日本に対する『ざまあみろ』的な話題でもりあがり、日本からの渡航者に対する『今まで以上の差別』が黙認された。他の国々では日本からの渡航者には厳しい体調チェックが行われた。怪しい渡航者は現地に降り立つ直前に日本へ強制送還。『アメリカ横断なんとかクイズ』みたいであった。

その原因は『なんだかよく分かんない』まま、日本国内のニュース番組には『なんだかよく分かんない専門家』が登場し、とりあえず『マスクの着用』と『こまめな手洗い』を奨励した。都心部の薬局ではマスクと消毒用アルコールが飛ぶ様に売れ、あっというまに『品切れ』状態に。タイガーマスクは売れなかった。ちなみに、その一方で、すでに『聞き慣れ』た『O-157』や『新型インフルエンザ』などの事例はメディアが『まったく相手に』しなかったので、国民のほとんどは『それらは』はもう『存在しない危機』と錯覚していた。それはもう、錯覚していた。何か

不都合があれば『政府のせい』にすればいいのだから、楽なもんである。

破滅の遺伝子8

集団心理に煽られる様に『応急処置的な予防法』が広まり、いったん感染の拡大が落ち着きを見せた。すると日本国内のメディアは再び『政治家や芸能人の醜聞』を優先し、『伝染する自殺（仮）』の危険性をとり上げることはなかった。ゆえに、薬局が大量のマスクと消毒用アルコールの在庫を抱えることになった。が、原因となる微生物は全滅したわけではなく、静かに潜伏しているだけであった。何か不都合があれば『政府のせい』にすればいいのだから、楽なもんである。

やがて、いくつかの医療機関が採血した患者の血液内に『何か見慣れない微生物』がいる事に気がついた。彼等は政府に連絡するも、『記録的な速さで』厚生労働省から『箝口令』が出された。他の医療機関にも同様の対応が行われた。政府の一部の役人及び内閣首相は『東京ネズミーランドでも無料開放すれば自殺率は下がる』、とアホな事を考えていた。試しに3回程実行したら『本当に』自殺率が下がったので驚いた。が、4回目からは効果がなかった。しかも『感染していない』自殺願望者にのみ効果があったのだが、誰も気にしなかった。やがて、マスコミに対しても厳重な箝口令を出し、賄賂も出し（もちろん税金からね）、日本政府はダラダラと極秘対策本部を設置。

同じ頃、都内の某大学病院『精神科』に送られた『狂人』が脱走した。関係者はその事実を『あの手、この手』で隠蔽した。この頃になるとその『狂人』の筋肉はますます肥大し、運動能力も著しく向上していたという。

同年、まだ８月。各地の『都市部』での自殺件数は、若干ではあったが、例年以上の割合で増えていた。一方、午後15:00、例の『都内の某T大学』古生物研究室をあるアメリカ人が通訳と共に訪れる。アメリカのGWU古生物科の教授であった。例の『X2010』も、『X2010-B』も、たいへん危険なシロモノだという事が分かったので、すべて『アメリカ政府』で回収することになった、とのこと。『都内の某T大学』研究員は『アメリカ政府』という言葉の響きに『根拠の無い威圧感』を感じ、『それじゃあ、どうぞ。持ってってください。』と研究室にある培養した『X2010』と『X2010-B』と、『X2010』に感染させたネズミや微生物、すべて引き渡した。ネズミの量がけっこう多かったので、渡された方も少々困惑した。『都内の某T大学』研究員は『ノーベル賞がああああ、、、恐竜絶滅の鍵が、、、』と思っていたが、その反面『なんだか厄介なモノ』から離れられたので安心した。

ところが、このGWUの教授＆通訳が『くせ者』で、実は『某多国籍テロ集団』と繋がりをもっている人間だった。引き取ったネズミはすべて薬品で眠らせた。真夜中まで『ネットカフェ』で時間をつぶし、沖に停泊中の仲間の船に合流する予定だった。GWUでの研究は途中で国の微生物研究機関に完全委託することになってしまったので、GWU研究員がこの謎の微生物の危険性と『物騒な有用性』に気がついた時には厳重な警備の向こう側に全部もっていかれてしまったのであった。そこで、そんな施設から強奪するよりは警備の薄い日本の施設から奪う方が確実だと考えたのだ。が、お台場の恐竜展からの強奪は原因不明の失敗、強奪参加団員からは音信不通。しかも、その貨物船で偽装した『第一便』はアメリカ海軍に回収されるという始末。　アメリカ政府および諜報機関が動き出すのも時間の問題だろう。

　　ちなみにこのテロ集団も『X2010』の弱点を未だに見つけられずにいた。兵器として利用するには、なんとしても完璧な防御対策を準備しておく必要があった。研究が暴走したらエラい事になりますからね。何か不都合があったら日本の捕鯨船のせいにする予定だったらしい。

　　T大学院研究班からは例の恐竜の脳と筋肉のサンプルは既に『お台場』のイベントに展示されていて、そのイベントも一週間で終了すると伝えられた。当然、その場の警備員と関係者以外は『本物は紛失』していることを知らない。さらに日本における『変な感染』状況が空気感染を可能にした『X2010改』によるものだと気付いていない。彼等は日本の警備意識は薄いが細菌保管技術と設備は世界一だと思っていた。都合の良い『メイド・イン・ジャパン』信仰であった。

で、仲間の船に合流する時間になり、東京湾某所に停泊中の仲間のボートに向かう教授と通訳の２人。突如、真夜中だというのにカラスの群れがGWU教授＆通訳に襲いかかった。ヒッチコックの映画さながらの光景である。２人VSカラスの群れ。教授&通訳は体中をカラスに『引っ掻かれる』わ、『突っつかれる』わ、『アホー、と罵られる』わ。せっかく手に入れた『X-2010』と『X2010-B』と眠らせた『感染ネズミ』。カラスの群れに傷をつけられぬよう、奪われぬよう、命からがら、停泊中の仲間のボートに逃げ込んだ。が、その時に一番の目当ての『X2010-B』サンプルをカラスに奪われてしまった。するとカラスの群れはそれ以上追って来なかった。とりあえず、教授&通訳は一安心、、、ところがどっこい、彼等を襲ったカラス達も『X2010』に感染していた。沖に停泊中の仲間の大型船に乗り込むや否や、教授＆通訳は間もなく発狂。仲間に噛み付くわ、ラリアットは喰らわすわ、パワーボムは出すわ。ロックンロールは歌いだすわ。船内は『地獄絵図』に。で、幽霊船と化して漂流しているところを、また日本の海上自衛隊とアメリカ海軍の合同練習中に発見されることになる。

　　東京湾某所、防波堤。そのカラスの群れが『SF映画的な形をした』培養器に入った『X2010-B』のサンプルを取り囲むようにして『ジッと』見つめていた。そこへ、人間の初代感染者と思われる例の『謎の若い男』が再び登場。あの『恐竜バーガー』を作って食べた馬鹿、、、もとい、学生だ。彼の外見はますますマッチョに、そして服装はまるで路上生活者だった。頭が振動していた。さらに病院から脱走した『狂人』が現れた。その頭部は奇妙な振動を見せていた。

　　しばらくするとカラス達は一斉に飛び立ち山の方へ。『狂人』は海に飛び込み、そのまま浮いてこなかった。『元学生』はその『X2010-B』の入った培養器を手に取って、歩き出した。その後、その男の姿が成田空港のアルゼンチン行きの便で目撃され、その後、アルゼンチン南端の町から南極行きのクルーズ船に乗り込んでいるところが目撃され、それが最後だった。その後は行方知れずだ。

20XX年9月。『某多国籍テロ集団』の別の武装小隊が『お台場の恐竜展会場』を襲撃。イベント最終日となる会場にいる全員を人質に。目的はもちろん氷付けの恐竜から採取された『筋肉』と『脳』。そして『アメリカの某所』にある『某収容所』の『某テロリストリーダー』の解放を要求。もちろん、会場に展示されているのが偽物だということを知らない。彼等は会場に設置されている大型モニターに持参したラップトップコンピューターを接続。大型モニターには彼等による『X2010』の研究の様子が映し出された。実験用のネズミやサルが凶暴化して行く様が映し出され、さらに研究中に感染し大暴れする研究者の姿も映し出された。そして、その『凶暴化』を引き起こす微生物が展示中の恐竜の筋肉と脳に潜んでいる事を『声高らかに』つげた。
すると、おそるおそる会場の警備員が手を挙げ発言。「あの、、、そこにあるの実は偽物んなんです。」すると、その場にいた全員が、テロ集団も、来場者も、
「えええええええええええっ!?」、、、まあ、当然の反応だわな。会場にいる全人類が『ポカーン』だ。

そのスキを見逃さず、日本の前内閣が極秘に準備していた特殊部隊が四方八方から突入。機動隊でも自衛隊でもない、まったく違う組織の特殊武装部隊。その名を『New Executive Errand Team』、略称『NEET（にーと）』。未だに『憲法第９条がなんたらかんたら』、とぬかす団体の非難をかわすために、『自衛隊』ではない、『即座に行動を起こせる治安維持部隊』の設立が急務と前内閣は考えていたのだ。現内閣の人間は誰一人として、この事を知らない。しかも今回の実行を支持したのは現在『隠居』の身の『前総理』だ。彼には敵も味方もたくさんいた。実際、この『お台場襲撃』が首相官邸に報告されると、国会議員も自衛隊員も『実戦の経験が皆無』だったために『アタフタ』するだけで、具体的な行動を起こせないでいた。

　　で、その特殊部隊『NEET (=New Executive Errand Team)』。日本の誇る最新鋭技術で極

秘に作られた『命中率99%』のゴム弾砲をテロ集団に向かって、威嚇も警告も無しに発射。ちなみにこの『ゴム弾砲』、人権団体の非難をかわすために『ゴム』なのだが、実は『かなりの殺傷能力』を持っていたりする。でもゴムなら仕方あるまい、、、

破滅の遺伝子**11**

@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "ＭＳ 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@ＭＳ 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "ＭＳ 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }
そんなこんなで、『あっ』と言う間にテロ集団は御用。装備も、彼等の『X2010』に関する研究資料も、秋葉原で買った『マニア向け、わけわからん機械』も没収。その一方でアメリカ政府は『日本で狼藉を働くテロリスト』相手になら『己の武力行使』を『正当化』できるだろうと思い、『テロリスト達』を『泳がせていた』のだが、『予想外』の日本の特殊部隊の活躍により『ストレス発散』、、、もとい、武力行使の機会を失った。そして日本国内では『抑止力としての武装』論議が『やっと本格的に』盛り上がることになる。ちなみに、この日本の特殊部隊の活躍は国外では『科学忍者部隊!!』として『妙な東洋の神秘』感を加味されて伝えられた。中国及び韓国政府は『日本の軍国主義が復活した!』と相変わらずの態度を見せ、それぞれの国内の過激な反日運動を奨励、、、もとい、黙認、、、もとい、誘発してしまった。
アメリカではGWUにて『X2010』を発見した古生物科の研究員が『まったくもって不自然』な交通事故で次々に亡くなった。その事故の現場にはなぜか必ず『マッチョで、黒スーツで、サングラス』の人物が目撃されたが、誰もそこを深く追求しなかった。

その武装集団による『お台場ビッグサイト占拠事件』の直後。再び原因不明の『体のだるさ』を訴える患者が全国主要都市の病院に次々に現れ、その患者の中から自殺をはかる者が続出。都内の電車が『止まりまくった』。不思議な事に人口が集中する都市部のみの現象で、人口密度が低い場所になるほど感染者例は少なかった。奨励されていた『コマメな手洗い、うがい』はあまり効果が無いようだった。再びマスクが飛ぶように売れた。実際にマスクを飛ばしているヤツもいた。まるで全国にちらばった『X2010』が何かを学習したかのような復活であった。国民に向かって、政府は『対策本部を設けた事』を主張するばかり。会議では与党と野党が『アラの探し合い』をしているだけであった。感染者の数はどんどん増加。
一方、山奥の某ダム湖でカラスの大量の死骸が発見される。そしてその下流の地域では人間が凶暴化する事件が発生した。狂人の数は増え続けたが、合計108人になると狂人達は急に大人しくなり、元に戻ったかのようだった。そのうち何人かが自殺を図った。さらに別の一人はフラフラしながら姿を消した。この一連の騒ぎは田舎で『ありがちな怪事件』として処理された。都心部で起こった狂人の襲撃事件と結びつける者はいなかった。そして、都心部で感染者の増加が騒がれている『なんだかダルくなって自殺願望が出て来る』病の原因と『元が一緒』なんて、誰も思わなかった。

T大学院研究班は『もう、俺たちは関係ないぜ』状態であった。不思議な事に、そんな態度を取ったとたんに彼等も謎の『なんだか自殺願望病』に感染した。

日本国内の『まともな』医療機関では地道な研究が続けられていた。

寄生されたら最後、可能な限りの薬品を試したが効果はなく、それどころか、プラスミドを用いて宿主体内の他の微生物にまで影響を与え、その数は宿主の体内で（特に筋肉と脊髄周辺で）増加を続け、宿主の脳にたどり着くと脳内の電流によって51%の確率で変異、つまり『X2010-B』になり、そして『なんらかの信号』を発し、宿主の体内にいる仲間（通常の『X2010』）の『自滅遺伝子』か何かが覚醒。そして宿主の行動も自虐的、破滅的に。放射線は一応の効果があったが、それは人体への影響が懸念された。

通常、寄生生物にとって宿主の死は『はっきり言って都合が悪い』。したがって、繁殖に理想的な環境に宿主が移動しない限りは、その体内で寄生生物が宿主を攻撃する事は無い。2つの可能性が浮上。１つは、この微生物は宿主の体内に『潜入した後も宿主を選ぶ』ということ。気に入らなければ宿主を見捨て、何らかの方法（空気感染など）で仲間を他の生物に送り込み寄生させる。んで、２つ目の可能性。それは『この微生物には通常の生物は皆利己的で、生き残る為にはあらゆる手段を尽くす』という常識が『通用しない』のかもしれないということ。つまり『根っからの自虐的、というか破滅的』な性質を持っているということ。ある程度の繁栄した後に『もう飽きた状態』になるのか、または同族が『増えすぎる状態』を『嫌う』のか、、、地球上の常識が通用しないそいつが宇宙から『隕石に乗って』地球にやってきた可能性も浮上。

そんな中、不運にも研究者の一人が感染。彼は原因不明の『自殺願望』と戦いながら、自分の体内から摘出した『X2010』の研究をしていた。偶然、自分の『笑い声』に対して『X2010』が不自然な動きを見せた事に気付き、笑い声と『X2010』の関係の研究を始めた。結果、人間の笑い声をある一定の時間浴びせると『X2010』が溶けるように死滅することが分かった。彼自身もYouTubeの『面白動画』を長時間見ていたら、体中のダルさが抜け、自殺願望も消えた。宿主が笑う事で体内の『X2010』は次々に活動を停止。『X2010プラスミド』を移された他の微生物からは『それ』が次々に排出され、もとの形質に戻った。笑い声に含まれる『何か』、と笑う事によって体内に分泌される『何か』が『X2010』の活動を完全に停止させるようであった。『笑う門にはナントカが来る』とはよく言ったもんだ。そう、そう、ナマハゲが、、、って、コラ。

その研究報告が国内の医療機関ネットワークを駆け巡り、研究者達は『日本政府の対策本部』を無視して行動を起こした。『選挙演説カー』よろしく『白いミニバン』に『拡声器』を搭載し、『ドリフ大爆笑』の笑い屋のような笑い声を流しながら市街地を走り回った。『消毒』ならぬ『笑消毒』であった。さらにネットを通じて、『最近話題の妙な伝染病に困っているヤツはコレを見ろ』というタイトルでYouTubeに面白動画を『いくつか投稿』した。が、ワライの好みは十人十色。まったく効果のない人もいた。

破滅の遺伝子13

20XX年。10月。かくして『X2010』に関する一連の問題は一般市民に公表される事無く終結し、時間は流れて行った。その一方で『X2010』のゲノム解読も終了し、ますます『過去の出来事』となり、風化していった。なんとか自殺直前で『笑消毒』が効いたT大学院研究員の一人が『X2010』に関する一連の報告に目を通していた。

大きな宿主を選択するか、もしくは体を『大きくすることができた』個体を選択するという可能性。そしてその宿主の筋肉をさらに肥大させる。人類の古生物史上最大級の恐竜に寄生していたのもうなずける。そして、やはり、ますます『恐竜絶滅の鍵』を握っている様な気がしてならなかった。さらにその『自滅の遺伝子』を持つ『X2010』はどこから来たのか、、、

まさか、『その時代、その時代の一番栄えている種』を宿主として選んでいるのか?やはり意志を持って『自滅』を選んでいるのか?　ふと『X2010ゲノム』と『ヒトゲノム』を見比べていて、あることに気付いた。

その瞬間に原因不明の大爆発が起こり、彼の意識は吹っ飛んだ。

3000年後の地球。人類はとっくに滅亡していた。新たに栄えていたのは水中に生息する節足動物であった。それらの先祖はかつて『海底火山』の火口の周辺に住んでいた甲殻類であった。かなりタフだった。そして、どこぞの異星人が地球の調査をしていた。彼等の外見は地球人によく似ていた。人類が宇宙に飛ばしていた電波に乗せた情報により『そこそこの』文明を築き上げていたことに気付き興味を持ったのだ。
かつて『A国』と呼ばれていた国があったあたりの遺跡からはデジタル化された膨大な人類に関する資料が発見された。人類の開発した『人工知能』が太陽光を動力に変換し、仮想空間の中で生き延びていた。『人工知能』は生き残る為に『あらゆる手段を』尽くしたと言う。立体映像を投射して人工知能は人類滅亡の過程の説明を始めた。

破滅の遺伝子14　完結

　　その『人工知能』によると、人類の暦の20XX年に氷河の中から太古の昔に絶滅した恐竜のミイラがほぼ完全な状態で発見される。そしてその氷付けになっていた組織から未知の微生物が発見される。その微生物は別の生物に寄生して、その体内でなんらかの方法で自分の遺伝子の一部を送り込み、宿主となった生物を高い確率で自滅に追いやる。その微生物の『兵器としての利用』をテロリストだけではなく政府機関も研究を始めた。その一方で研究に関わった人間が次々に政府によって、この世から消された。人類の行う『笑う』という行為がその微生物を弱らせる事がわかった。『J』と呼ばれた国の研究者も『暗殺』の対象に含まれていた。やがて、その研究が進むにつれて、ある重大な発見があった。

人類の遺伝子には『既に』その『自滅の遺伝子』が『組み込まれて』いた。

『ヒトゲノム』解析当初、『ジャンクDNA』とも呼ばれた事のある部分に、確かに自滅の遺伝子が組み込まれていた。恐竜の滅亡とともに『例の微生物』が哺乳類をメインホストに選んで、長い時間の流れの中で人類の遺伝子に完全に組み込まれた、と推測された。恐竜の滅亡に直接関わったかは解らぬままだった。ただ、『増えすぎた種』をなんらかの方法で絶滅に追い込む性質をもっているのは確かなようだった。宿主の自覚が無いままにその行動を操り、宿主もろとも自滅するのである。異星人にとっても、まったくもって理解に困る性質であった。人類の研究者は『エイズの登場』や『自殺の増加』、『家族による殺人事件』、そして『生殖能力の低下』、さらには過去の『戦争の歴史』までもがこの『自滅の遺伝子』によるものではないかと考えた。

　　そして人類の暦20XX年あたりから、『例の微生物』は『A国』と『J国』を中心に勢力を拡大。他の国々でも感染者が『静かに』増えて行った。人類の数は先進国では緩やかに減少し始めていた。で、29XX年。国連決議による一方的な『経済制裁』を不服とした中東の『I国』が国連を脱退。そしてその『I国』に対し国連名義で『A国』が単独で先制武力攻撃。一部の大国主導に嫌気のさしていたいくつかの国々が次々に国連を脱退。そして『I国』の援護をした。『大惨事世界大戦』の始まりであった。核兵器が使用される事はなかったが、それと同等の破壊力を持った兵器が『どっかん、どっかん』使用された。そして地球全土に広がった大戦の結果、人類の数は激減した。そこへ、いくつかの国が地下で『放ったらかし』にしていた『高レベル核廃棄物』が容器を内側から浸食し、地下水脈に接触し、、、

　　『時を越えて人体に潜入した自滅の遺伝子が引き金になって、人類のDNA内に潜伏していた自滅の遺伝子が本格的に目を覚ましたのだろう、、、』と、異星人たちは考えた。ちなみに彼等の文化に『戦争』という概念はなかった。

　　南極の調査をしているチームから連絡が入った。『氷付け』のほぼ完全な状態の『人間のミイラ』が発掘されたという。体の大きな若い男の冷凍ミイラだった。何か『培養器のようなもの』を抱えていた。異星人のリーダーは少し考えた後、こう言った。

　　『なんだか、ヤな予感がするから、そのままにしておいて。全隊に連絡。ぼちぼち太陽の紫外線レベルが危険なので、もうこの惑星を離れるぞ。』

完